

宗教の淵源を旧石器時代に探る

保坂 康夫

1. はじめに

本論では、旧石器考古学の立場から、特に日本列島における宗教の淵源について考えてみたい。宗教は人間の思考の体系であり、文字や芸術で表わされないと理解できないものではあるが、人間の持つ世界観は遺物や遺跡として表現され、考古学によって把握することは可能とされる⁽¹⁾。

一方、宗教の淵源を考える時に必要な視点は、人間の能力もさることながら、人間の社会の問題も重要である。社会とは人と人との関係であり、その関係性を読み取り、どのような人間相互の取り決めが成立しているかを問題とするのが社会的視点である。関係性や社会的な取り決めは人間個々人の世界観に反映されているはずであり、遺跡や遺物に表現されているとの見通しを持つことができる。

人間社会を研究する社会学を立ち上げたのがエミール・デュルケムである。その研究の中で注目されるのが『宗教生活の基本形態』⁽²⁾である。この著書の中で、宗教現象が信念と儀礼という根本的なカテゴリーに分けられること、宗教的信念は人間が表象する事物を聖と俗という対立する二つのクラスに分類するとし、宗教生活の聖俗二元論を提示した。その典型としてオーストラリア大陸の先住民族であるアボリジニの社会に注目し、乾季の狩猟・採集の世俗的な生活と、雨季の儀礼を中心とした聖なる生活の二元対立的な社会生活を分析し、宗教的観念の起源について考察している。

本論では、こうした二元対立的な社会生活が日本列島の旧石器時代に存在していることを提示し、日本列島における宗教の淵源が旧石器時代にあることを主張する。

2. 旧石器時代と宗教

論議に入る前に、世界の旧石器時代と宗教についての論議について俯瞰してみたい。

人類は700万年の歴史を持つとされるが、その中で250万年前に最初の文化的創造物として石器が出現する（河合2010）。筆者は、この石器について、機能的な意味とは別に、ヒトとヒトとを取り結ぶコミュニケーションのための象徴的意味が付加されたものとして出現していると主張し、そのことがサルを作る道具との決定的な違いであるとした（保坂2016）。このことは、少なくとも250万年前には現在の人間社会の基盤が成立していることを示していると考えられる。

そして、現生人類であるホモ・サピエンスが20万年前にアフリカ大陸において出現する。ホモ・サピエンスは、現代人的行動のひとつとしてシンボルを用いる能力を獲得しているとされる。シンボルを用いる能力とは、「個人が頭の中に思い描いている特定の出来事や概念を、絵や記号や音声といった、何らかの創作されたシンボルに託して表わすこと」とされる（海部2005）。

代表的なものは、ヨーロッパの洞窟壁画やビーナス像である。洞窟壁画はフランスからスペインにかけて集中して確認され、40000年前頃から15000年前頃まで継続的に作成される。洞窟壁画については、呪術に用いられたとする説があるものの、宗教の社会的起源とされるトーテムズム（社会集団が動植物や自然現象などと同一の祖先を持つと信じ、それを崇拝する信仰や制度）であるとする説も唱えられている（五十嵐2019）。ビーナス像は、ヨーロッパ東部からシベリアにかけての地域に40000年前頃から25000年前頃にかけて見られ、呪術的性格が指摘されていることが紹介されている（木村1997）。

一方、宗教の起源に関連して葬送儀礼が注目される。40～30万年前のスペインのアタエブルカにあるシマ・デ・ロス・ウェソスで、ホモ・ハイデルベルゲンシスが遺体を洞穴に投棄するという行為が確認できるとし、これが葬送の初源である可能性が指摘されている（長澤2016）。遺体を特別に扱う行為は、来世や祖先といった世界観に伴うものである可能性がある。ホモ・ハイデルベルゲンシスから20万年前に分岐してヨーロッパ地域を中心に生活していたホモ・ネアンデルターレンシスは、確実に遺体の埋葬行為を行っていた（長澤2012）。一方、ホモ・サピエンスは、同じくホモ・ハイデルベルゲンシスから20万年前頃に分岐してアフリカで出現し、埋葬行為を行っていた。特にホモ・サピエンスの墓には豊かな副葬品が見られるようになる。長澤昌宏氏は、墓の構築に「先祖崇拝の観念」を読み取り、その淵源については旧石器時代を射程に入れている（長澤2016）。

日本列島には38000年前頃にホモ・サピエンスが到来するとされる（海部2016）が、1万ヶ所以上とされる列島の旧石器時代遺跡に対して、埋葬遺構は数か所があげられる程度である（長澤2012・2016）。また、線刻画やペンダントといったシンボルの一種がごく少量発掘されているものの（堤2009）、ヨーロッパ等で宗教との関連性が指摘されている洞窟壁画やビーナス像はまったくみられない。

こうした状況から、日本列島での宗教の淵源を考察するには別の視点が必要である。そこで、宗教の原型を論議したエミール・デュルケムの聖俗二元論に注目する。

3. デュルケムの『宗教生活の基本形態』

エミール・デュルケム（1858～1917）は社会学の創始者のひとりとされ（橋本ほか2016）、その代表的著書である『宗教生活の基本形態』は1912年に出版された。この中で、デュルケム

独自の宗教の定義が示されている（第1部「前提問題」、第1章「宗教現象と宗教の定義」）。

「宗教現象はまったく必然的に、信念と儀礼という、二つの根本的なカテゴリーに分けられる。前者は世論の状態であり、表象からなっている。後者は特定の行為様式である。」(P77)

「儀礼それ自体を特徴付けるためには、まず儀礼の対象を特徴付けなければならないだろう。そして、この対象の特殊な性質が示されるのは信念においてであり、したがって信念を定義した後でしか、儀礼を定義することはできないのである。」(P78)

宗教的信念は、「人間が表象する事物を、二つのクラス、二つの対立する類（ジャンル）に分類することを前提しているのであり、これらの類は一般に、二つの判明な用語—俗と聖という語がこれを十分よく表している—によって指し示めされている。」(P78)

「聖なるものを俗なるものとの対比において定義するためには、もはや両者の異質性しか残されていない。」「この異質性はきわめて特殊なもの」、「それは絶対的」、「人間の思考の歴史において、かくも根源的に区別され、かくも根源的に相互に対立しあっている、事物の二つのカテゴリーの例はほかにない。」(P81)

まず、宗教現象が信念と儀礼という根本的なカテゴリーに分けられ、信念は世論の状態、表象（シンボル）からなっているとす。宗教的信念は、人間が表象する事物を、聖と俗という対立する二つのクラスに分類することを前提としているとする。この対比は両者の異質性でしか定義できないとし、この異質性はきわめて特殊なもの、絶対的で根本的な区別であり、人間の思考の歴史において根源的な対立関係であるとしている。儀礼は特定の行為様式であるが、具体的には信念を定義した後でないと定義できなとした。

このデュルケムによる聖俗二元論は、オーストラリアのアボリジニ社会にみられる社会生活の二元的対立によって例示され、分析されている。アボリジニの狩猟・採集生活は、乾季と雨季に二分され、乾季は狩猟・採集の世俗的な生活が、雨季には儀礼を中心とした聖なる生活が営まれるとする。

そして、宗教的観念の起源が示される（第2部「基本的信念」、第7章「これらの信念の起源」）。

「オーストラリアの社会生活は、二つの異なる局面を交互に経過する。あるときには、人びとは小集団に分散し、独立して自分たちの仕事にいそしむ。核家族はこのとき、それぞれ狩りをしたり、漁をしたり、採集したり、要するに、利用できるすべての手段によって必須の食料を手に入れることで暮らしている。またあるときはこれと逆に、人々は、数日から数か月にわたる期間、特定の地点に集まってきて、密集する。…この機会に、宗教的な儀式が執り行わ

れ」る（P473～474）。

「ひとたび諸個人が集合すると、…すぐさま彼らを並外れた高揚状態に移すのである。」（P474）

「宗教観念が生まれたのは、このように沸騰した社会的環境においてであり、またこの沸騰そのものからであるように思われる。」（P479）

宗教的観念の起源について、特定の期間に特定の地点に集まってきて密集することで生み出された高揚状態、すなわち沸騰した社会的環境において生まれたとした。

以上がデュルケムの宗教の起源に関する聖俗二元論であるが、ここで注目したいのは、宗教的信念である聖と俗の定義は、絶対的で根絶的に対立する異質性であるとする点である。聖を表象する考古資料が確認できないとしても、異質性をもって対立する社会生活が抽出できるならば宗教生活の存在を確信することが可能となるわけである。さらには同時に、特定の行為様式である儀礼の存在や、特定の地点に密集した沸騰した社会的環境が指摘できたならば、宗教生活の確実性が高まるとすることができる。

4. 旧石器時代の日本列島での宗教の淵源

ここでは、デュルケムの聖俗二元論で示される社会生活が、人類の初源的な社会である旧石器時代の日本列島社会に存在するかを論議する。聖に関する象徴的な遺物は日本列島の旧石器時代遺跡にほとんど見出せないことはすでに指摘したが、異質性をもって対立する生活の存在が確かめられれば、その背後には聖俗の二つの対立するジャンルに分類する宗教的信念が存在する可能性が高まる。対立的に二分された異質な社会生活が存在するか、その生活の中に特定の行為様式である儀礼は存在するか、さらには宗教的観念が生ずるとした沸騰した社会的環境が存在するか、この3点を論議することによってデュルケムの指摘する宗教生活の基本形態が存在している可能性を検討する。

1) 24000～22000年前の南関東地域での遊動生活の様相

日本列島の旧石器時代は、遊動的な狩猟採集生活とされる⁽³⁾。遺跡にはその痕跡が残されており、多くは石器と礫である。石器は、生活活動の中心である狩猟のための狩猟具を中心とした生活用具である石器と、その製作過程で出た廃棄物（剥片・碎片・石核など）からなる。また、礫は、石蒸し焼き調理に用いられた礫群を構成する焼礫である⁽⁴⁾。石蒸し焼き調理とは、たくさんの礫を焼き、熱した礫と肉や野菜などと混在させて草や土などで覆い、ある程度の時間放置して蒸し焼きにする調理法で、礫群はそれに活用された焼礫の群集（図1）である⁽⁵⁾。石器は旧石器時代遺跡に普遍的に存在するが、礫群はすべての遺跡に装備されている

ものではない（保坂2012）。これは、旧石器時代の遊動生活においては、石蒸し焼き調理を行うための一連の行動（礫群活動）を行わない移動生活の中のある時期が存在していることを示す。礫群活動を行う季節と礫群活動を行わない季節とが存在するとすれば、二元対立的な社会生活が提示できることになる。

筆者は、24000～22000年前⁽⁶⁾の南関東地域⁽⁷⁾を移動領域に含む集団について分析し、一連の移動生活の中で、通常規模の礫群活動を行う期間（礫群活動期間）、礫群活動を行わない期間（礫群活動不実施期間）を持つとともに、集団が集合して大型礫群を形成する大規模な礫群活動を実施するような期間（大規模礫群活動期間）の3つの生活期間をもっていることを提示した（保坂2019）。移動生活の中で、礫群活動期間と大規模礫群活動期間とが連続する礫群活動を行う季節と、礫群活動不実施期間が連続する礫群活動を行わない季節とが分離できるとなれば、二元対立的な社会生活が提示できることになる。大規模礫群活動期間の存在は、沸騰した社会状態を、礫群の存在は儀礼の存在を間接的に示している可能性がある。

2) 二元対立的な生活の痕跡

筆者はまず、生活の活動量を示すと考えられる石器と礫の出土量とを指標として遺跡を分類した（図2）。石器の量が増えると礫の量が増えるといった相関関係は必ずしも見られず、石器と礫の量はそれぞれ独立した違った要因によって成立していると考えられた⁽⁸⁾。一方で、石器と礫の量は台地・丘陵ごとで特徴的な関係を示しており、台地・丘陵ごとに違った生活の展開が推定される。

通常の遺跡は、石器500点未満、礫500点未満の範囲にあり（一般遺跡）、いずれの台地・丘陵にも分布している。礫の量は一般遺跡と同様でありながら石器の量が500点以上と多くなる遺跡（A領域遺跡）がある。これは、いずれの台地・丘陵にも存在するが、特に多摩丘陵北部や武蔵野台地北部に多くみられる（図2）。

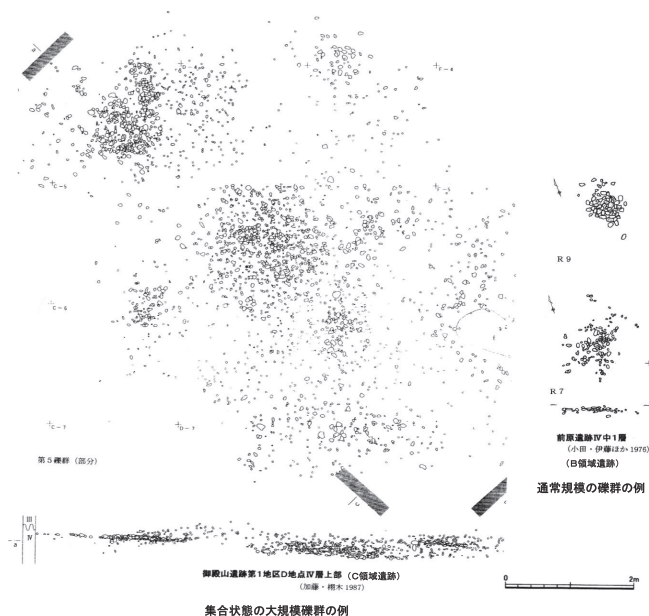


図1 24000～22000年前南関東地域の礫群

一方、礫の量には違いが明瞭に示されており、礫が全く出土していない礫0点遺跡、500～1000点の中規模遺跡（B領域遺跡）、礫1000点以上の大規模遺跡（C領域遺跡）がみられた。礫0点遺跡は大宮台地、武蔵野台地北部、多摩丘陵に分布している。B領域は相模野台地中央部に集中する。C領域遺跡は武蔵野台地南部中央部に集中する（図2）。

礫0点遺跡とC・B領域遺跡とは、地理的分布を異にして偏在的に分布している。後述するようにC・B領域遺跡では礫群を用いた調理が活発に行われており、調理対象が確保できる環境、すなわち季節性と強く関連していると考えられる。一方で礫群活動を活発に行い、他方で礫群活動を行わないという、食物調理に関連する対立的な偏在性は、季節性を背景にして成立している可能性が高い。

そこで以下では、それぞれの遺跡の中身を構成する居住単位の問題まで立ち入って、生活状況を比較することで、礫群活動を行わない季節と礫群活動を行う季節という、特定の生活期間の連続で示される2つの季節を描出する。

①礫群活動を行わない季節

礫0点遺跡は、礫群活動不実施期間の存在を明示する遺跡であり、この期間を過ごす集団のみの居住地として重要である。石器はブロックと呼ばれる石器の集中部分に分かれて分布しており、このブロックが居住単位と考えられている。ブロックには礫群と重なるもの（重複ブロック）と、重ならないもの（単独ブロック）とがある。礫0点遺跡は単独ブロックのみによって構成される遺跡であるが、他の遺跡でも単独ブロックが存在している。単独ブロックについて礫群活動不実施期間を過ごす集団の居住痕跡とすると、他の遺跡でも移動生活の中で礫群活

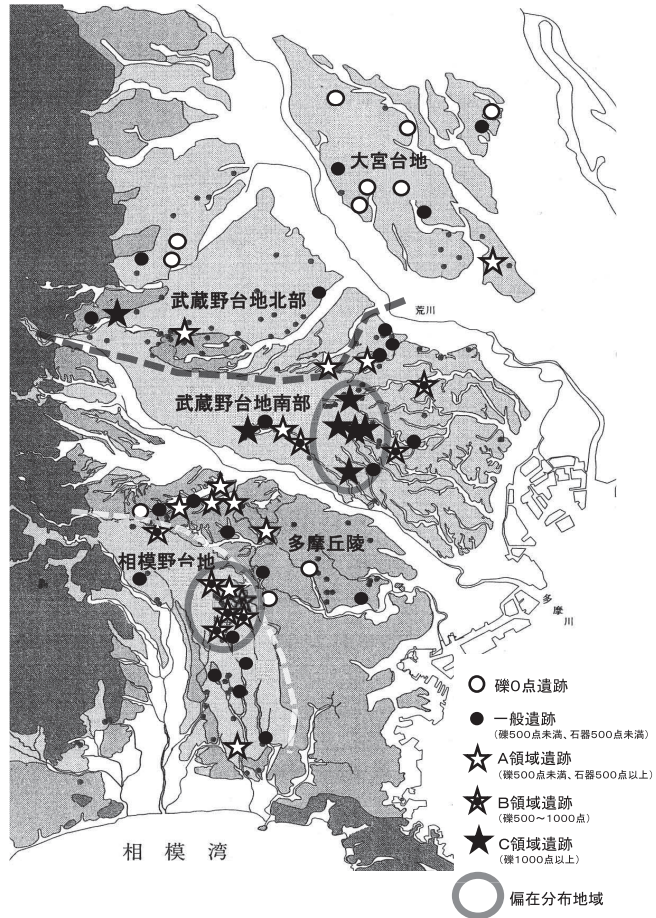


図2 24000～22000年前南関東地域の遺跡分類と偏在分布

表1 礫群やブロックに関する要素の傾斜分布

	C領域遺跡 武蔵野台地南部中央部	B領域遺跡 相模野台地中央部 武蔵野台地南部	一般遺跡 各台地	A領域遺跡 大宮台地・武蔵野台地 北部・多摩丘陵に多い	礫0点遺跡 大宮台地・武蔵野台地 北部・多摩丘陵	
礫群活動に関する要素	★ 18% 2.0	★ 4% 1.5	1.0	0.5		(上数値)200点以上の大規模礫群の割合 (下数値)礫群の多さを示す数値=ブロック数に対する礫群数の割合平均値
礫群活動を行う期間に関する要素	● 20% ● 68%	● 17% ● 48%	● 4% ● 49%	● 4% ● 33%		(上数値)200点以上の大規模ブロックの割合 (下数値)重複ブロックの割合
礫群活動を行わない期間に関する要素	○ 0% ○ 32%	○ 8% ○ 52%	○ 0% ○ 51%	○ 11% ○ 67%	○ 26% ○ 100%	(上数値)200点以上の大規模ブロックの割合 (下数値)単独ブロックの割合

大規模礫群
 大規模礫群（構成礫数200点以上）を形成する大規模礫群活動期間を示す

礫群重複ブロック
 礫群活動期間を示す

単独ブロック
 礫群活動不実施期間を示す

動不実施期間が設定されている可能性がある。

単独ブロックの占有率を見ると、礫0点遺跡ではいうまでもなく100%ではあるが、A領域遺跡で67%と過半数を占め、一般遺跡で49%、B領域遺跡で48%と半分程度とかなり高率なのである。一方、C領域遺跡では32%と他の遺跡とは違って低率である（表1）。

さらに、生活期間や生活累積の頻度を示す指標として単独ブロックのブロック規模についてみてみると、200点以上の大規模ブロックが単独ブロックの占有率の高い礫0点遺跡やA領域遺跡では10%以上あるのに対し、C・B領域遺跡や一般遺跡では10%未満や0%である。礫0点遺跡とA領域遺跡とC・B領域遺跡とは地理的な集中分布域を異にしており、礫0点遺跡に向かって単独ブロックの占有率や規模が増加する傾斜傾向が読み取れるのである（表1）。

単独ブロックについては、占有率を全体で集計すると58%となる。単独ブロックが礫群活動不実施期間を過ごす集団の痕跡とすると、礫群活動を行わない期間は遊動生活の半分を占めるといってよい状況なのである。礫群活動を行う、行わないで二分される社会生活の存在が推定される。

礫群活動を行わない生活については、特に大宮台地や武蔵野台地北部、多摩丘陵において、礫群活動不実施期間のみの生活場所が形成され、その周辺では礫群活動不実施期間を過ごす場所として選択されることが多いとすることができる。また、礫群活動不実施期間が長期間におよんだり、移動生活の中での礫群活動不実施期間においてたびたびこの地点に回帰していることを示しているとしてもできる。

このように、礫群活動不実施期間のみの生活場所を中心に、礫群活動不実施期間を過ごす生活の地理的な傾斜傾向が読み取れることから、移動生活の中で礫群活動不実施期間が連続する礫群活動を行わない季節の存在の可能性が提示できる。

② 礫群活動を行う季節

一方、礫群の状況を見てみると、C・B領域遺跡は、後述するように礫数200点以上の規模の大規模礫群が存在する特異地点である。また両者ともに、礫群数がブロック数に対して多くある傾向が強く、礫群活動を活発に展開している様子が見て取れる⁽⁹⁾。さらに、C・B領域遺跡は、重複ブロックが多くあり、その規模も大きいものが多い。200点以上の大規模ブロックが重複ブロックの占有率の高いC・B領域遺跡では10%以上あるのに対し、A領域遺跡や一般遺跡では10%未満である（表1）。

つまり、C・B領域遺跡は大規模礫群が形成され、礫群が多く形成される特異地点であるとともに、礫群活動期間が長期間におよんだり、移動生活の中での礫群活動期間においてたびたびこの地点に回帰していることを示している。

大規模礫群や多数の礫群の形成で象徴される特異地点であるC・B領域遺跡と、礫群活動不実施期間のみの生活場所で象徴される礫0点遺跡とは地理的分布を異にして偏在分布を示している。さらにC・B領域遺跡と礫0点遺跡を中心に、礫群活動期間と礫群活動不実施期間とが一方でより多く設定される傾斜分布を示していた。このことは、礫群活動を行う季節と行わない季節という二つの対立する季節が存在していたか、あるいはそれに近い生活状況があった可能性を強く支持すると考える（図3）。

3) 儀礼の要素

礫群は、宗教儀礼そのものとはいえない。しかし、それ自身に儀礼的な要素があることは認めることができる。礫を集める、燃料や保温材を取りそろえる、調理の完成時間に合わせて集合して、参集者に調理物を分配し、時間を共にして食事をする。個々人のスケジュールを調整して統一的な集団行動が実施されている。こうした儀礼的要素をもつことから、さまざまな儀礼との親和性⁽¹⁰⁾があると思われる。当然、宗教儀礼との親和性があり、宗教儀礼と並行してあるいは組み込まれる形で、通常の礫群活動や大規模な礫群活動が実施されていたとも考えられる。つまり、礫群活動は宗教儀礼の存在を間接的に表示している可能性がある。

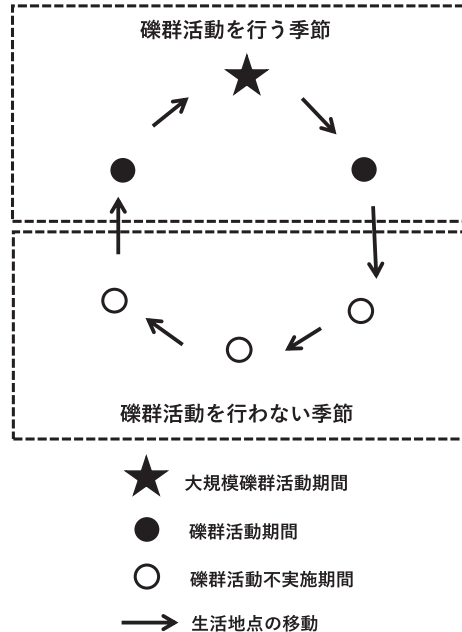


図3 24000～22000年前南関東地域の二元対立的な社会生活モデル図

4) 沸騰した社会状態

C・B領域遺跡には大規模な礫群が存在する。200点以上の大規模礫群は武蔵野台地南部のC領域遺跡4遺跡に1基ずつ、相模野台地のB領域遺跡2遺跡に3基が確認できる。礫0点遺跡やA領域遺跡が多く分布する地域とはまったく別の地域であり、数が少ないものの、移動生活の中で大規模礫群活動期間があったことは確かである。ただし、その機会は数年に一度といったほどにきわめて少ないことになる。C領域遺跡では200点規模ほどではないものの比較的規模の大きい礫群も多くある。大規模礫群に準じた規模の礫群活動については比較的多くあったと言える。礫群活動を行う季節の中で、時として集団が極度に集中することがあり、このことが沸騰した社会状態を出現させていた可能性がある。

5. おわりに

デュルケムの宗教の起源に関する聖俗二元論を手掛かりに、24000~22000年前の南関東地域で展開される旧石器時代人の遊動生活において、宗教生活が展開されていた可能性について論議した。宗教的信念の存在を示す対立的に二分された異質な社会生活が存在するか、宗教現象を構成する儀礼は存在するか、さらには宗教的観念が生ずるとした沸騰した社会的環境が存在するかの3点を論議した。

礫群の有無や、礫群とブロックの規模について地理的分布をみることで、両者の偏在分布や傾斜分布を見出した。そして、旧石器時代の遊動生活において、大規模な礫群を用いる生活が武蔵野台地と相模野台地の中央部に集中し、礫群を用いない生活が大宮台地と多摩丘陵に集中する偏在分布を示した。これは食物調理に関連する対立的な偏在性であり、季節性を背景にして成立している可能性が高いと考えられる。さらに、対立的に偏在分布する二つの地域を核として、礫群とブロックの数や規模といった要素が両者に向かって傾斜分布する様相を描出した。こうした状況から、礫群活動を行う季節と行わない季節という二つの対立する季節の存在を推定した。対立的に二分された異質な社会生活の存在を示すと考えられる。また、大規模な礫群は多くの人間の集合状態を示すものであり、ここに沸騰した社会状態を看取ることが可能であることを指摘した。礫群が宗教的儀礼であるとは言わないが、儀礼的な要素を持ち、儀礼活動との親和性をもっており、そこに宗教生活が展開していたことを間接的に示していると考えられる。以上3点の論議から、デュルケムの指摘する宗教生活の基本形態を見出すことができ、日本列島における宗教の淵源が旧石器時代にある可能性が高いと主張したい。

注

- 1) コリン・レンフリューによる考古学のテキスト『考古学』（レンフリューほか2004）では、「遺物の一部は人々の考えや意図の産物である」とする考え方が示され、「それぞれ個人の心の中には、世界を見る視点、解釈の枠組み、そして認知地図が存在する」と仮定できるとする。認知地図とは、人間は「自分なりの世界についての知識に基づいて行動」し、「その知識を通して感覚的印象は解釈され意味が与えられる」とする世界観や思考様式をさす。そして「共に生活し、同じ文化を共有し、同じ言語を話す人々の社会では、同じような世界観や思考様式を共有しやすい」ことから、「共通の認知地図」について認識が可能であるとする。こうした世界観や思考様式は、遺跡や遺跡から出土する遺物に表現されているとする。
- 2) 山崎亮訳の「ちくま学術文庫」（2014）を引用する。そこで山崎氏は、デュルケムの意図するのは「すべての宗教体系に共通する本質的諸要素」であるとし、「宗教生活の原初形態」の訳は不適切であったとしている。
- 3) 日本列島の旧石器時代の狩猟採集生活をおくる集団は、遊動生活を展開していると考えられている。一定の期間、ある居住地で狩猟採集生活を展開してから、別の地点に移動してまたしばらくの期間狩猟採集生活をおくる。黒曜石などの石器石材の獲得を移動領域内で行う関東地域では原産地と石材消費地との間が最大200kmにもおよぶものであるが（国武2015）、黒曜石産地との間にある狩猟地をめぐりながら移動する場合と、石材を獲りに行く行動と、狩猟採集の生活活動とが分離している時期とがあると考えられ、24000～22000年前頃については後者であったとされる（国武2008）。
- 4) 礫にはこのほかに、焼けていない礫を中心とした、1kgを超える重量の礫で構成される配石がある。しかし、遺跡の中での出現量は、ごく少数である。
- 5) 石蒸し焼き調理説が最も有力だが、他にも焼け礫を毛皮や木の皮などで作った容器に入れた水の中に投入して湯を沸かし調理対象をゆでるストーンボイルング説（中沢2017）、焼石を敷きならべてその上に肉などを置いて焼くバーベキュー説（辻本1987）などがある。また礫群使用の状況について、礫群を構成する焼け礫は何度も使われている痕跡が確かめられおり、これは礫群自体が何度も使用されるとする説（鈴木・渡邊2016）が主流であったが、最近、礫群の構成礫は何度も使いまわすものの、礫群自体は使用のたびに作り替えられるとする説（古田2017）が提示された。

なお、礫群は、38000年前の炭素14年代が検出された遺跡である熊本県石の本遺跡や長野県貫ノ木遺跡で確認されている。この年代は、日本列島に現生人類が到来した年代として提示されている、今のところ最古の年代である（海部2016）。北海道から九州・南西諸島の地域で見られるが、特に九州南部や関東・東海地域の遺跡に多く見出されている。今回論議した年代を含め、30000～20000年前に礫群が最も多く形成されるが、20000～16000年前頃には礫群が九州南部や南関東を除いてほとんど見られなくなる。
- 6) 「砂川期」と呼ばれる時期で、この年代値は中村2013による。この時期は、最終氷河期の最寒冷期に

あたるが、礫群数や住居単位であるブロック数が、日本列島各地で最大値を示した時期のひとつであり、狩猟採集対象がもっとも多く確保できた時期と考えられ、寒冷環境に適応した旧石器時代社会が最も活気づいた時期であると考えられる（保坂2019）。

- 7) 武蔵野台地、大宮台地、多摩丘陵、相模野台地を含む領域（図2）。武蔵野台地はさらに、黒目川流域以北で、狭山丘陵、入間台地などを含む武蔵野台地北部と、それ以外の武蔵野台地南部とに分けた。
- 8) 具体的には、礫は礫群を構成し、礫群は調理単位であるので、調理物を分配する人間の数に対応すると考える。これは、礫群活動を行うために参集した人数、集団規模と対応する。一方、石器はブロックという生活単位を構成する。生活単位はあまり極端な集団規模の変動がみられない家族などと考えられたため、ブロックの規模は生活期間や回帰の利用の頻度と対応すると考える。
- 9) ブロック数に対する礫群数の割合を見てみると、その数値が大きいほど礫群数が多いと判断できる。遺跡類型別にまとめて平均値を求めると、一般遺跡は0.3~3.5で平均1.0、A領域遺跡では0.1~1.0で平均値が0.5、B領域遺跡は0.6~6.0で1.5、C領域遺跡は0.6~5.0で2.0である。平均値でみるとA領域遺跡はブロック数に対してその半数しか礫群がないが、一般遺跡ではほぼ同数ずつの礫群・ブロックで遺跡が構成され、B領域遺跡ではブロックの1.5倍、C領域遺跡では2倍の礫群が存在し、礫群過多の状態であることが分かる。
- 10) 飲食や歌舞などをして遊び楽しむ宴（うたげ）というものがある。伊藤幹治氏は、デュルケムの聖俗二元論を引用して、聖なる季節における集団的な祭儀を、高揚した心の触れあいとして「宴」に読み替え（P24）、宴は非日常的世界のイベントであるとする（まえがき ii）（伊藤1985）。礫群は共食のイベントであり宴であるといえる。宴には、葬儀の後の直会など、さまざまな要素があるが、非日常的な世界のさまざまな活動と結びついて現れる。このことを親和性と表現した。

〈参考文献〉

- 五十嵐ジャンヌ（2019）「ヨーロッパ旧石器時代洞窟壁画の解釈」『日本旧石器学会第17回研究発表会シンポジウム予稿集 旧石器研究の理論と方法論の新展開』日本旧石器学会、68-70
- 伊藤幹治（1985）『宴と日本文化—比較民俗学的アプローチ—』中公新書
- エミール・デュルケム（1912）『宗教生活の原初形態』（山崎亮訳2014）ちくま学術文庫
- 小田静夫、伊藤富士夫ほか（1976）『前原遺跡』国際基督教大学考古学センター
- 海部陽介（2005）『人類がたどってきた道—“文化の多様性”の起源を探る—』NHKブックス、66
- 海部陽介（2016）『日本人はどこから来たか？』文藝春秋
- 加藤秀之、榎木真（1987）『井の頭池遺跡群 武蔵野市御殿山遺跡第1地点D地区』御殿山遺跡調査会
- 河合信和（2010）『ヒトの進化700万年史』ちくま新書
- 木村英明（1997）『シベリアの旧石器文化』北海道大学図書刊行会、314-323
- 国武貞克（2008）「回廊領域仮説の提唱」『旧石器研究』4、日本旧石器学会、83-98

- 国武貞克（2015）「黒曜石の獲得からみた関東・中部地方の移動領域」『旧石器考古学』11、日本旧石器学会、79-95
- コリン・レンフリーユ、ポール・バーン（2004）『考古学—理論・方法・実践—』（池田裕ほか訳2007）東洋書林、393-395
- 鈴木忠司、渡邊武文（2016）「礫群使用回数推定法試論—岩宿時代集落研究によせて—」『古代文化』67（4）、19-41
- 辻本崇夫（1987）「礫群の形成過程復元とその意味」『古代文化』39（7）、2-17
- 堤隆（2009）『旧石器時代ガイドブック』新泉社、76-79
- 中沢祐一（2017）「後期旧石器時代のヨーロッパにおける礫—狩猟採集社会におけるストーンボイリングの役割と意義—」『古代文化』69（3）、95-104
- 長澤宏昌（2012）『散骨は、すべきでない』講談社ビジネスパートナーズ、12-19
- 長澤宏昌（2016）『今、先祖観を問う』石文社、16-21
- 中村雄紀（2013）「旧石器時代の年代と広域編年対比—関東—」『日本旧石器学会第11回講演・研究発表シンポジウム予稿集 旧石器時代の年代と広域編年対比』日本旧石器学会、61-64
- 橋本大三郎ほか（2016）『社会学講義』ちくま新書、29-31
- 古田幹（2017）「礫の使用状況と礫群の形成—泉水山・富士谷遺跡第16地区の事例から—」『古代文化』69（2）、1-22
- 保坂康夫（2012）『日本旧石器時代の礫群をめぐる総合的研究』礫群研究刊行会、452
- 保坂康夫（2016）「考古資料の贈与論的理解—「物」の初源について—」『研究紀要』32、山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター、1-6
- 保坂康夫（2019）「礫群をめぐる砂川期の移動生活」『旧石器研究』15、日本旧石器学会、53-68

<キーワード>

『宗教生活の基本形態』 聖俗二元論 礫群 ブロック 偏在分布 傾斜分布 親和性